

gsdy salon

～ Soundscape Night ～

5 JUN 2010

guest

SAWORI NAMEKAWA

行川さをり

TARO SUKEGAWA

助川太郎

data

『GSDyサロン ～Soundscape Night～』

ゲスト：行川さをりさん (Vo.)

+助川太郎さん (G.)

開催時期：6/5 (土) 18:00～21:00

会場：Lab-cafe

人数：30名

料金：2,000円

料理：ブラジルのお酒と料理

18:00 start

1st Live 50min

18:50 break/food&drink

19:40 talk

20:10 2nd Live 50min

21:00 end



「サロンを“利用”しよう」

文／照井丈大

今回のサロンには歌手をお招きしました。「風景が浮かんでくる。」ライブを通して感じた僕自身の体験が、企画の第一歩となっています。単純かもしれないけれど、「風景」について一見もっているユースの皆が、この人の歌を聴いたら果たしてどんな感想を抱くのだろう、それを知りたかったというのがきっかけです。

ゲストの行川さんは建築学科出身です。それでいて歌手として活動されています。そういった背景がいつそう、表現者として、ひとりの人間として興味を惹かれました。サロンという場を利用して、いわゆる演奏としてのライブのみならず、「語り合う」ことで色々を探っていこうと考えました。

事前に何度も打ち合わせを重ねてきましたが、サロン当日はこちらの予想は大きく覆えられました。前半のパフォーマンスは「ボサノバ」を想像していた観衆を見事に裏切り、ポルトガル語あるいは言語にならない声によって独特の世界観が紡ぎだされました。ついには、中盤のトークセッションを無用のものとし、後半のライブに時間を割くように会場の空気をごく自然に変えてしまいました。明らかに、聴き入りたいという人の方が多かったのです。観衆はそれぞれに自由に想像を巡らしていたように感じました。あの時間はそれだけで、音楽に浸るだけで良かったのです。

あれからしばらくの時間が経ちました。トークタイムが短めに終わった分、このペーパーには行川さんの音楽感・あるいは人生観について多くを語って頂くことができました。参加して下さった方々はもちろん、参加できなかった方々にも興味深い内容が盛り込まれているので是非読んでみてほしいです。

最後に、個人的なことですが、僕は料理が好きで学生の頃から友人らとケータリングを開いていました。でも社会人になって久しくそういう機会はありませんでした。今回はライブにも料理にも対応可能なLab-cafeさんという素敵な会場のお陰で、ブラジル郷土料理とお酒を披露できました。学部時代の同期らと協同してイベントを作れたことに満足しています。

「サロン」にはまだまだ可能性があると思うし、良い意味で利用し甲斐があると思います。これからもさまざまな企画が立ち上がることを楽しみにしています。



LAB-CAFE

OPEN 19:00 - 26:30

URL www.lab-cafe.net

Meiwa Hongo Building 7F,
4-1-3 Hongo, Bunkyo, Tokyo

“サロンで披露して頂いた楽曲について解説して頂きました”

文／行川さをり

ると森や海の香りがじっとりと溶け込んだ、空気を纏う感覚を思い出します。

後半は切ない歌詞の曲を2曲お届けしました。基本的には前半や休憩を挟んだあとの流れでいこうと思って、選曲は少なく、即興時間を長く設定しております。

*cuculucucu paloma

助川さんには、伴奏ではない、助川さんが構築する音の層を作ってくださいとお願いました。メキシコの有名な楽曲です（だそうです）。待っても来ないあなたを思いすぎて、鳩（Paloma）になってしまった。鳩になっても、あなたを待って泣き続けている。切ない歌詞。少し暴力的にも聞こえるくらい、無関係に存在しているギターの音。音楽の形とかジャンルとか、そもそも、音楽として空間を区切るより、立ち上がる言葉を包むものとして、音をとらえて欲しい思いでした。この曲は『talk to her』（スペイン映画）の中で使われています。

*cafe

通過点の象徴としての駅。その駅の中のCAFE。そこで、周りとはまったく違う時間が、あなたを目の前にして流れている。耳はあなたの声だけをとらえて、あなたの声を作るatmosphere（雰囲気）に包まれている現実を記憶してゆく。しかし、ある瞬間、私の目は見開かれ、実は存在していた、沢山の音が耳になだれ込んでくる。あなたの笑顔も、あなたの声も、全部が崩れ去り、駅という、通過点に立ち尽くしている自分を知る。崩れ去るあなた。崩れ去る自分。崩れ去る記憶。そして、通過点である駅にいる自分。自己解釈がかなり入りますが、そんな内容の歌詞です。Egbert Gismonte(エグベルトジズモンチ)の曲。

曲の話の流れで、話を広げてみます。声は人間が発する音。雑音にもなるし、私として人の中に入っていく、音。耳の'まぶた'は「認識」という脳内の動きだけ。目の'まぶた'のように、身体運動として遮蔽する機能がない分、耳が何をとらえたいのか、何をとらえようとしているのか、または、強制的に何が入ってくるのか、「とらえる」行為を意識化するのが難しい器官だと思います。しかし、逆に「無意識」の存在を理解しやすい器官でもあると思うのです。だから、音によってよみがえる記憶は、瞬間的にしかも、暴力的に強くイメージが立ち上がる。『cafe』はそんな無意識の暴力に自分自身が翻弄されていく物語を音楽で表現していると解釈しています。

*one note samba

A.C.JOBIMの名曲。ワンノート（一つの音程）だけでも、サンバのリズムがあれば曲として楽しめるというコンセプトをそのまま曲名にしている、その曲作りの解説がそのまま歌詞になっている面白い曲です。おそらくご存知の方もいらっしゃるのではないかと思います。舌を噛みそうな、早口ソングです。

まず、声はメロディ担当の楽器、または言葉が発する楽器である前に、「音」であることを改めて知っていただきたい思いがありました。まず、「音としての声」を、環境音と同じくらいの大きさで、そこにある空気に溶け込ませていこうとしました。ここについては、また後ほど詳しくお話します。

前半の選曲としては、
○ブラジル音楽の音楽的な魅力、リズムとサウンドを知っていただくこと。
○声がかもったり明るく響いたりするブラジル語は、自分の心の明暗を混ぜてくれる音であることを知っていただくこと。
○譜面や一定のリズムといった、本来の音楽ルールに安心しながら楽しむ音楽という定義をせずに、音楽に触れていただくこと。

前半はこの3点を大事にして選曲しました。そして、休憩時間はブラジル料理を楽しんでくださったので、前半最後の曲は私にとって、今、一番歌っていてブラジルを思い出す曲‘DUNAS’をお送りしました。この曲は、言葉の響きが多様である曲です。「夏の強い日差し」「濃い青をした空」。熱がまとわりついてくる暑さだけど、日本とは違う軽い空気である感じ。でも歩くとジワっと汗をかく。海から内陸へ歩いて行くと、空気が重くなっていく感じ。そんなバイア（北東部）を歌った曲で締めくくりました。

*intro

弱音の即興。その場にある空気に、私たちの音を薄く溶け込ませるように。「ここからライブです」という線引きをしたくなかった気がします。「歌としての声」の前に、「音としての声」をまずお伝えしたかったです。

*cair da tarde (アカベラ)

たぶん、曲として認識されていないかもしれない。でも、それがねらいです。

「音としての声」から、「歌としての声」へブラジル語という不思議な言語が染めてゆく、声の色を知っていたかこうと思って歌っておりました。また、私という歌い手が、今含まれている空間との関係性を感じるため、個人的な決め事ですが、「歌としての声」を必ずライブ冒頭に、出させていたたいです。

*garota de ipanema

私も助川さんも、ブラジル音楽を主に音楽活動をしてきました。この曲は、2人にとっても大事な曲。そして、ご存知の方も多いかないと思いい選曲しました。

*bebe (エルメート・バスコアル)

鬼才エルメート・バスコアルの名曲です。

*dunas

DUNAS（ドゥーナズ）とは浜辺とか、砂丘という意味。バイア地方はブラジルの北東部の地方でサルパドールという場所の歌です。海の歌ですが、山の生き物が沢山登場する歌。

歌の一番最後に、「三月終わりのサルパドール。夏の終わりの時期。庭先で満開の花がゆったりと私を包んでくれた、あの時を今、思い出す」という歌詞があります。夏が終わる時期になると、バイアを離れていた私を思い出します。ジワッと汗ばむ時期、目を閉じ

List

*intro

*garota de ipanema

*bebe

*dunas

*cuculucucu paloma

*cafe

*one note samba

イベントに先立ち、

参加者の方々から質問を受け付けました。

当日あまり伺えなかったことも含めて、
行川さんにお答え頂きました。

Q & A

Q1. 建築→音楽へと進むことになったきっかけ

今回、テーマに沿って記憶を掘り起こしながら、自分の人生を編集しなおすような作業をしております。この文章は、サロンでのライブ・トークでの経験も踏まえて、変化している部分もあるかと思いますが、あらたな読み物として、読んでいただけたら嬉しいです。

建築から音楽へ。この感覚を実はあまり持っていない。というのは、建築から音楽へフェーズを変えていったという感覚がないからです。

社会的に見た分類でいうと、今の私は「音楽」に所属していて、建築から離れてしまった人になっています。でも、今考えると、そういう意味では学生時代から建築から離れている人間だったのだと思います。結局のところ、建築という「モノ」よりも、現象という「コト」に興味があったということ。それはどちらも「空間」とか「景観」とか、広義で考えるとつながる二つだと思っていますが、「コト」についてどう学んでゆかかをたどっていくうちに、音により瞬時に、場が切られていく感覚を意識化、また、記述することができないかと思うようになりました。そんな流れより大学院は音響工学の研究室（電気・情報系）に進みました（残念ながら、大学院については、他分野だっただけに基礎勉強で終わってしまいました。）さらに、自分自身がコトを作る人になりたい、記憶と時間軸も交差するような「コト」を考えたいと思ったときに、声の活動を充実させていこうと思うようになりました。

今は、記憶すべてが根拠となって発信されてゆく声を使う活動によって、現象・身体・記憶の関係項を提示していきたい思いで音活動をしております。これが広義で言わせていただけるのなら、私の空間創造活動なのだと思います。

Q2. なぜブラジル音楽

まず、歌ってみて楽しかったから。歌い始めて、その思いは今も同じように心にあります。

ポルトガル語には暗くて明るいという矛盾した感覚が言葉の響きに表れていて、初めて歌ってみた時に身体に響いた詩的な振動を今でも覚えています。その可能性と、ブラジル音楽への興味で今まで歌い続けているような気がします。

発音により声にテクスチャが作られ、その声が体に響くことで自分の記憶と音が出会い、次の音のテクスチャが決まってゆく、その一連の音のイメージが微妙に重なり合いながら時間軸を作ってゆく。時間を共有することで、お互い違う場を切ってゆく。切り取った場の経験が記憶と出会う、何かしらの感覚を生み出す。この芸術における表現者と鑑賞者の関係について教えてくれたのもブラジル音楽でした。

この先、私の音楽はブラジル音楽で終わることはないです。最近では、ブラジルという外国の音楽でより日本の感覚を知ってもらいたいと思っています。日本の声、和の声。声そのものの中にもっと、日本を潜めてゆきたい。

それはきっと、日々の自分が食べるもの、日々見ていること、毎日の生活そのものが声になってゆくと思っています。生活を変えていく必要があるのかなど最近では思っています。

Q3. 音としての声／歌としての声とは

正直なところ、これまでの日々、特にこの数年は発声の基礎勉強しかしてこなかったと思います。学んだ発声が自分における何の表現手段になってゆくのか理解して自分に定着させていくことを繰り返していました。未だに勉強中です。

また、声は体が勝負なので、コンディションで声の出し方が微妙にかわってしまう。だから今の瞬間のコンディションと目の前にある空間との関係を知るために、第一声を、大事にしたいと思っています。

音としての声／歌としての声 とは

音としての声は、呼吸をなるべく感じないようにさせて、出来る限り環境に近づけて環境に音を置いてゆく感覚で出す声です。

歌としての声は、その逆。当たり前ですが、声は人が発するものです。沢山の記憶を持っている生き物が物語を話すように、その空間に声をおく。歌としての声とは、人の相が繰り返された音として意識して出す声です。

今の活動におけるライブでは、第一声は、意識して、歌としての声を出しています。

ただ、今回のサロンでは音としての声で第一声を持ってきました。これは、P.07冒頭でも述べたように、声は「音」であることを改めて知って頂きたかったからです。

Q4. 空間／空気感について

音が響くと空気に空気感が生まれます。その空気感は、モノの趣と同じようにとらえて、伸ばしていきたいと思っています。モノが置かれたことで、周りの空気が動いてゆく、それを意識して音による空気感を読んでいたいと思っています。

おそらく、茶道や華道におけるモノへの考え方に影響されていると思います。大きく影響を受けたのは、作陶家の八木一夫氏や、芸術家のリ・ウーファン氏の言葉の中にある「善の精神」に大きく傾倒していると思います。

Q5. ライブで大切にしていること。作り手（与える側）としての気持ちのあり方のようなものについて

- ① I have all memories for your music .
(私のすべての記憶はあなたの音楽のために存在する)
- ② Se pudesse entrar na sua vida .
(もし、あなたの人生に入ることができたならば)

最近はこの2つのことを大事にしていようと思っています。

(②はブラジル人の作詞・作曲家Chico Buarqueの言葉です)

作り手として、社会的な意味での気持ちのあり方とは違うと思うのですが、目をつぶったときに、目の奥から斜め上辺りの脳を意識して、すべての記憶を無意識的に音に直結させる感覚で声を空間に置き、皆さんの記憶にアクセスしてゆくことを大事にしたいです。大げさに言いすぎて恥ずかしいですが、声という一つの芸術を提示したいという思いを大事にしたいと思っています。

Q6. 今回のサロンを通じて感じられたこと

歌うことと、自分を語ることを同じお客様の前で行うことは初めての経験でした。

自分の過去・現在を声というテーマで編集する機会を与えていただき、ぼんやりと続けてきた声を出す活動は、内部活動として空間を創造してゆくことであったことを改めて感じる事ができ、それを理解してから声を出すことは、とても新鮮な体験でした。

Q7. 今後の音楽への思い

今は活動としては、歌を伴奏者と歌うことを行っていますが、もっと声による空間を意識した活動をしていきたいと思っています。はっきりした方向を今、提示出来ませんが、もっと声の表現を豊かにさせながら、より多くの方と自分の声でつながってきたいです。

Q8. 音楽以外に興味をもっている分野、モノごとについて

芸術全般に興味があります。

父はヨーロッパ系の鍛造工芸をやっていることもあり、幼少期から芸術は身近にありました。しかし、音楽はまったく身近ではなかったです。

また、趣味程度ですが、母は着物が好きで、茶・花の趣味のある人です。この2人の下で、工芸や芸術は身近なものとしてありました。

あと、ヨーロッパ人がアジアを理解してその感覚を取り入れてるのが好きです。本来の日本の感覚を何か、間違えてとらえていて、その差異がキッチュなのが最近好きみたいです。

あと、北欧デザインはとても好きです。日本と同じような静謐な美と、日本とは違う感覚が混ざってるのが嬉しくなります。

陶芸、彫金、これは10年前から、やりたいやっていたと思ってました。

父の仕事は、鉄を炉で熱して造形してゆくことですから、かなりの力が必要です。これは無理だなと幼いながらに思った覚えがあります。でも、最近70歳近くになってからの父の作品が急に繊細になってきたことに、私はとても驚きました。デザインを学んでいないので、皆さんが楽しめるかっこいい作品は作れてないかも素晴らしいことなのかと思わずに入られません。何かしら、モノ作りをしていきたい思いがあり、陶芸と彫金にはとても興味があります。

もうすぐ伝統工芸展だった気がします。今年も見に行きたいなと思います。

興味の深さはまちまちですが、自分の気になる人・コトを書いてみます。

八木一夫、リ・ウーファン、ローリー・アンダーソン、イサム・ノグチ、杉本博司（芸術家・写真家）、柴田敏夫（写真家）、大竹伸朗、船越桂、板谷波山、民芸、オスカー・ナイヤー、ガウディも。そういえば、学生時代、建築家だと、ステイブン・ホールが好きだったな。

絵画だと、モディリアーニとロートレック、あと、アンリ・ルソーとかが好きです。

あと、料理も最近興味深いです。って料理は得意ではないのですが、向上心はあります（笑）特に塩。素材の個性をいかに沢山感受するか、それを引き立てる沢山の種類の塩のうまみはどんなものがあるのか学んでいきたいですし、時間をみつけて料理も勉強したいです。また、農業も興味深いです。

今、思いつくのはこんな感じ。これは話が終わらなくなりそうなので、この辺で。自分の好きなことを考えるのって、楽しいですよ（笑）



food & drink



ブラジルの国民食で、豚肉の塩漬けやリングイッサ（ソーセージ）とフェイジョン豆（黒豆）とを煮込んだもの。元々は上流階級の人々が食べない豚の鼻、耳、尻尾、内臓や肉肉などの部位を黒人奴隷が黒インゲン豆と煮て食べていたのだが、美味しく食べる奴隷たちをみて主人が真似るようになり、ブラジルの代表的国民料理となった。街の食堂では、水曜日と土曜日にランチメニューでフェイジョアードが出る。なお、白米とともに盛り付け、ファロoppaというキャッサバ芋の粉を振り掛けるのが通例。なお、今回のサロンではフェイジョン豆をベースに、ごろごろ豚肉とベーコンを煮込み、トマトと玉ねぎで食べやすくアレンジしました。



箸休めに、さっぱりピクルスを用意しました。ホテルオークラのレシピです。

ブラジルの郷土料理とお酒によりサロンを演出しました。
(pop designed by Hitomi Ninomiya)

フェイジョアード

材料（4～6人分）
豚肩ロースブロック 500g
フェイジョン豆 500g
トマト 2個
玉ねぎ 2個
リングイッサ 6本
塩 適量
にんにくすりおろし 小さじ1
月桂樹の葉や
ファロoppa

作り方
前日

豚肉を塩漬けにする。
フェイジョン豆をたっぷりと浸かるくらいの水につける。

当日

- 1、フェイジョン豆を茹でる。浸けた水+かぶる位の水を加え2時間煮る。水が少なくなるので随時足し入れる（鍋底の焦げに注意）
- 2、豚肉の塩を軽く洗い流し、別鍋に水をかぶる位に入れ、アクを取りながら50分茹でる。冷めたら好みの大きさに切り茹で汁に戻す。
- 3、フライパンにトマトと玉ねぎのみじん切り、適当な大きさに切ったリングイッサを入れ炒める（鍋の数が多くなるので2の鍋で煮込むことにしても良いかも）
- 4、豆が柔らかくなってきたら、2と3を加えて、月桂樹の葉や塩コショウ（ピヨンがあると味がはっきりする）で味を調え、全体がどろっとしてきたら完成。
- 5、白米を盛ったお皿に取り分け、ファロoppaをかけて食べる。

ピクルス

材料（4人分）
人参 1/4本
小玉ねぎ 4個
赤ピーマン、黄ピーマン 1/2個
ズッキーニ、セロリ 1/2本
カリフラワー 1/4個
カブ 1個

<漬け汁>
ワインベネガー 100cc
白ワイン 100cc
塩 6g
砂糖 16g
ローリエ 1枚
赤唐辛子 1本
にんにく 1片
粒こしょう 少々

作り方

- 1、皮をむいた人参は3～4mmに、セロリは1cmの厚さに切る。カブも皮をむき、8～12等分にする。
- 2、その他の野菜は適当な大きさに切る。
- 3、漬け汁は材料全部を鍋に入れ、一度沸かしてから冷ましておく。
- 5、全部の野菜をさっと茹で、タッパー等に移し、漬け汁を入れて冷蔵庫で保存。4～5日目が食べごろ。

※レシピは『ブラジルのかわいいデザインたち』ピエ・ブックス を参考に手を加えたもの。
※材料は、「キョウダイマーケット」（店舗・インターネット販売）が充実しています。



ブラジル北東部バイーア地方の郷土料理。元々はアフリカ海岸部で食べられていたシーフードのシチューで、それがポルトガルを経由してブラジルに伝わった。煮込み料理でありながら水は使わず、シーフードと野菜とデンド油という真っ赤なヤシの油とココナッツミルクで煮込む。

ムケッカ

材料（4人分）
海老 100g
あさり 60g
玉ねぎ 1個
ココナッツミルク 240cc
オリーブ油 30cc
デンド油 30cc
塩 小さじ1
にんにくすりおろし 小さじ1

<仕上げ用>

トマト 1個
ピーマン 2個
パプリカ 1個
海老 8匹
白身魚 2切れ
パクチー 適量

作り方

- 1、玉ねぎを薄切りにしてオリーブ油で炒める。玉ねぎがしんなりしたら海老を加えさらに炒める。
- 2、1にかぶる位の水、あさり、塩を入れ30分煮る。
- 3、2のあさりの殻を取り除き、ミキサーでペースト状にしてココナッツミルク、にんにく、デンドオイルを入れひと煮立ちさせる。
- 4、仕上げの材料を入れ、火が通るまで煮る。
- 5、パクチーを入れて完成。やはり白米とともに食べる。

リングイッサ

ブラジルでは毎晩の夕食に欠かせないのがリングイッサ（生ソーセージ）。ドイツのソーセージとは違い、ポイルではなくグリルで焼いて食べます。

作り方

リングイッサは豚の腸詰で、日本で買えるものは輸入された冷凍物になるが、自然解凍させたものを、油を引いたフライパンで焼くだけ。途中で、肉汁と一緒に水分が出てくるが、その水分が無くなるのと焼き目がついたのを確認すれば食べ時。

なお、日本の輸入マーケットでも様々な種類のリングイッサが購入できる。香草入り、チョリソーという名そのままの辛いものなど。いずれもボリュームミーで、塩気が強くビールのおつまみにとても合う。

カイピリーニャ

カサーシャというラム系のスピリッツで作るカクテル。今回のサロンでは、「cachaca 51」「3 FAZENDAS CACHACA」の2本を用意しました。

作り方

別のコップで乱切りにしたライムと多めのグラニュー糖を入れてすりこぎ棒などで潰す。クラッシュアイスで飲む。



感想

なかなか聞く機会がなかったボサノバでしたが、あの夜は色々なことを考えるきっかけになりました。その中で一つ『音楽』と『遊び』の関係について書きます。

先月、大学の授業の課題で『ホモ・ルーデンス』（ホイジンガ）と『遊びと人間』（ロジェ=カイヨフ）という二冊の遊びから社会を分析する本を読みました。

『ホモ・ルーデンス』の中で楽器の演奏playは遊びの要素（①はじまりと終わりが規定された時間的まとまり。②一定の秩序。③ルールの中の自由。④生活の非必需的要素。等）を持っているという文章があります。また『遊びと人間』はホモルーデンスの理論を発展させた内容であり、遊びは『競争』『運』『目眩』『模擬』の4つの組み合わせから出来ていると述べられています。そして二者とも文化の発展は遊びの原初的要素を奪い衰退させていることを憂えています。もちろん、この二冊にはこれ以上のことが書かれています。

行川さん、助川さんの音楽はこれらの本の遊びの原初的な要素が現れているように感じられました。演奏者・聴衆がともに陶酔（目眩）を起こすような感覚。行川さんと助川さんの競争感。お二人の動物や自然を模倣したような演奏。楽器を使うというルールが有りながらも叫びたりエレキアコースティックギターの電気信号を変換して奏する自由さ。

西洋音楽の貴族生まれの哲学上の秩序に則し成立している音楽とは異なり、原初的であり遊び的であるから、誰でも共感できる音楽でした。

あの夜は音楽だけでなく料理にも空間にも『遊び』であったり「原初的な感覚」を多く感じ、参加者と場を共有できた感覚を味わうことができたのですが、長くなってしまっているのでこれくらいにしておきます。

行川さん、助川さん、コーディネーターの照井さん、そして準備をして下さったスタッフの皆様、楽しい夜をありがとうございました。

加藤俊介(東京工業大学 M2)

□企画について

ボサノバは全くの初体験だった。ちょっと遅れて会場に着き、始めは椅子に座って聞いていたが、後半、周囲の人の飲み物等をついだりしながらの、「ながら聴き」の方が楽しめた気がする。変に力が入らず、すっと身体に染みわたるといような感じで。一人心はリオデジャネイロの大人の夜であった。

今回のように、時間の新しい楽しみ方を経験して、いろいろな方向に感性のアンテナを立てていると、その分良いデザインもできるようになるのかなと思う。

行川さん、助川さん、そして運営の皆さん、素敵な時間をありがとうございました。

□運営について

今回はけっこう知らない方がいたので、ユースの先々代表として積極的に会話をしてみました。知らない参加者同士はあまり会話をしていないようで、もっと相互のコミュニケーションを楽しめる場作りが今後の課題かと思えます。最初に周辺の人と自己紹介タイムを設けたり。

永山悟（アトリエ74）

「なぜ音楽を聞か、なぜ小説を読むか、なぜ絵を観るか」

音楽を聞きに行った。なぜか。仲間に会うためだ。気分を変えるためだ。

東野圭吾という作家を決して好きではないが、以前文芸誌のインタビューでこんなことを話していた。

「友人に誘われたら断らない」。曰く、自分が興味のないものにこそ、今まで出会えなかった宝石がある。

なぜか頭から離れない。

音楽は聞か、ボサノバはほとんど知らない。ジョアン・ジルベルトを少ししかじったことがあるくらい。「興味がない」とつぶねるなら簡単だが、乗ってみるのも悪くない。チャンネルはきっと多いほうがいい。行ってみて、よかった。音楽が、自由だった。ほとんどがフリーの演奏と声が、実に楽しそうだった。ほんとは、スタンディングで聞きたかったけど。飯もよまかった。名前は分からないけど、多分カレー。味は覚えている。そして、照井君が楽しそうだった。キッチンで、踊ってた。

楽しければいいじゃない。それでも僕は、そこに意味を見つけようとしてしまう。「なぜ音楽を聞か」。その間は、「なぜ音楽をしているか」と対である。質問すると、答えは明確だった。

少しでも気持ちよくなって帰って欲しい。そして何かを持って帰ってほしい。そうだった。

なぜ音楽を聞か、なぜ小説を読むか、なぜ絵を見るか。個人的な楽しみとは別に、僕の中に何かを蓄積したいからだ。何かを持って帰りたいからだ。思想的でなくていい。声高に何かを叫ばなくても、哀歓がなくてもいい。それでこそ、染みるものがある。会場を出て、寿司を食って、帰った。すごく、楽しかった。そして次の日、ボサノバのCDを買った。

こういう、一見土木や建築や都市などに関係のないサロンも、すごく魅力的だ。小津の映画を見て衣食住の描き方から何かをもらう。小説の読み比べで感受性の違いに気付く。

絵を見るのは難しいかもしれないが、誰かがつくったアート作品なら見れるかもしれない。そして、何かを持って帰って自己に溜めることで、何かを変えられないか。これは共同幻想か。

島津翔（日経BP社）

普段あまり自分から積極的にライブやコンサートに足を運ばない身としては、今回は偶然巡り合った機会だったので、そんな場で、あの会場の一体感というか、音楽が作り出す空間に身を置けたことは、とても幸運だったと思います。

これからも、GSユースで一見土木や建築、都市とは関係ないようで実は僕らの考え方を大きく広げてくれるようなイベントが行われていけば、と思っています。

金井雄太（東京大学 M2）

「空間」と「音楽」

開始早々に音楽が始まり、「あれ？もうはじまったの？」とソワソワしていたのもつかの間。お二人の奏でる音楽にすっかり包まれていました。音楽に疎い私は専門的なことは全然わからないのですが、行川さんの声と助川さんの楽器、そして会場のみんが作り出す「空間」を全身で楽しんでいました。

また、行川さんの「音楽」と「空間」についてのお話がとても印象的でした。「音楽について考えるとき、まずはその空間について考える」とのこと。部屋の広さ、響き方、会場の人、、、その空間にある数々の要素を感じ取り、一端自分の中へ吸収し、咀嚼し、音となって出てくる。空間を敏感に感じ取ること、吸収すること、そして表現すること。空間から生まれた音楽が、空間へとかえっていく。そのプロセスがとてもとても興味深かったです。

生の音楽と手作りの美味しいごはん。とても贅沢な時間を過ごすことができました。行川さん、助川さん、そして照井さんをはじめスタッフの皆様、ありがとうございました。

福角朋香（東京大学 M2）

予想を大いに裏切ってくれた一夜だったと思います。その場の雰囲気や音を紡ぐ即興の演奏を聞きながら目を閉じれば、驚くほど鮮明にこれはないどこか別の空気に包まれる。

いつ終わるともなく続くそれこそ、5分の楽曲では表現しえないサウンドスケープだと思います。

好き嫌いや上手下手という評価から少し外れた、単純に心地いいかそうではないかという音楽のあり方。

これこそ行川さんの経験によるところがあるのだと思います。個人的には前半部がアジア的で湿り気を含んだ空気感が心地よいものでした。

戎野朗生（フリー）

私は、酒でほろ酔いになり、おいしい食事で腹が満たされ、二人が奏でる音楽に耳を傾けていました。目をつむると、色んな光景が浮かんできます。大自然の中で動物達が戯れている姿、グランドキャニオンのような広大な大地や大きな川や滝。メロディーのリズムが変わる度に、目の前に広がるシーンが移り変わる体験は新鮮で、非常に心地よいものでした。

どこか人間や自然のルーツのようなシーンが多く浮かんできたのは、行川さんの体内の奥底からだす動物的な音や助川さんが奏でたユニークな楽器によるところが多いと思います。

用意して頂いたブラジル料理も絶品でした。また会場に充滿していた匂いもさらにライブを引き立て、独特な雰囲気を作り出していました。

視覚だけでなく、嗅覚、聴覚が刺激され、非常に心地の良い空気を体験しました。景観の分野でも、視覚の話がメインですが、やはり、においや音も大切にしたい要素だと再確認できたサロンでした。

企画運営してくださったスタッフ及び、ゲストの2人にはこの場を借りてお礼を申し上げます。有り難うございました。

飯沼伸二郎（早稲田大学 M2）

音によってその「場」に深みを与えるだけでなく、「空間」にも深み加わり、うまく言えませんが、視覚としてではなく、「体の感覚」として空間の広がりを感じることができたことに驚きを感じました。

あの演奏以来、いつも街歩きをするときにはたいていイヤホンをつけて歩いていたものが、はずして歩くようになりました。笑

でもこれは、大きいことを言いますと音によって空間を感じるができることを知ったからであり、あの夜がなければ、一生自分はイヤホンを付けたままだったかも知れません。

滞在時間はすごく短かったにも関わらず、大きなことを感じられたのは、演奏者勿論のこと、料理や会場構成を行ってくださった照井さんをはじめとする関係者の方、会場にいた人のおかげであると思っています。今さらですが、ありがとうございました。イヤホンも外させてくれてありがとうございます。また、ききにしていきたいと思います。

喜多峻平（芝浦工業大学 B4）

先日のGSdyサロン ～Soundscape Night～は今思い返しても感動的な夜でした。

行川さをりさんと助川太郎さんのフリースタイルの演奏を聴いて僕が思い出したのは、数年前に参加したイタリアでのワークショップでした。そのワークショップはヴェネチアやカルロスカルバの建築を訪ねて5感で建築をとらえて作品をつくるというものでした。

思えば常日頃、計画を考える時には工学的な知識等によって構築的に物事を進めていっている事が多くなっています。しかし、行川さをりさんと助川太郎さんの様な感情的な物をそのまま、ちょうど朱肉を付けてハンコを押す様に表現出来る人に会おうと、一方で場とか雰囲気といったものを自分を通して感性的に表現する一面も必要である事を痛感するのです。そういった意味で自分に取っては非常に意義のある一夜となりました。

また、この様な良いイベントがあると自分にとってもユースのメンバーにとっても非常に良いと思います。普通に毎日を過ごしている脳が凝り固まってきて感性的な部分を知らず知らずの内に追いやってしまいますので、そういった時には彼等の音楽を聴きにいきたいと思えます。

素晴らしい演奏をして下さった行川さをりさんと助川太郎さん、またテレイさんを始め準備をして下さったスタッフの方には心よりお礼を申し上げたいと思います。

山田敬太（フリー）

ボサノバ、という音楽を生で聞くのは初めての経験でした。声やギターが生み出す、その場限りで体験できる音というのは空間を一瞬にして変容させ、私自身もその場限りの空間を楽しむことができました。

食事と音楽によってずいぶん魅力的な空間になることに驚きました。あの狭さが、普通のライブとは違う感覚にさせたのかもかもしれません。

とても貴重で、楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

高柳誠也（東京大学 B4）

guest

Sawori Namekawa
<http://www.namekawasawori.com/>

Taro Sukegawa
<http://www.tarusukegawa.jp/>

 *gsdy salon -soundscape night*

staff

Takehiro Terui
Hitomi Ninomiya
Koji Matsumura

thanks

Shinjiro Iinuma
Yuta Kanai
Seiya Takayanagi
Tomoka Fukusumi
Masaya Yoshida

photos

Hitomi Ninomiya
Syunsuke Kato

editor

Takehiro Terui